式道路は眞にリビヤの生命線である(一九五頁)、それは大規模工事と土人の勞賃の廉なる爲に、一キロ一千磅であつたと云ふ(二〇一頁)。然し伊太利政府は云ふ「リビヤの道路は少しも餘計な費用を要してゐない。それは駐兵費の節約に依つて優に償はれた」と、同樣に一戸當り二千磅の植民も之を駐兵費と考へる事に依りて頗る經濟的と考へる事が出來る。第一回には四百萬磅(將來の役に立つものを差引き)で人口二萬人を植民したのであるが、五箇年繼續すれば人口十萬の植民に對し、二千萬磅を要する譯で、植民としては誠に世界中他に比類なき高價なものであるが、十萬の植民は四萬人の豫備兵を意味し(二一〇頁)、リビヤの駐兵費又は伊太利よりの派遣費と考へればかゝる莫大なる植民費も成程と首肯される(二二二—二二三頁)。

六、總督バルボ

リビヤ植民を語るに際してはその總督バルボ(Balbo)に就て一言語らざるを得ない。バルボは航空次官として伊太利の空軍を作り上げ、一九二九年航空大臣に任ぜられ、一九三一年には歐洲より南米ブラジルへの無着陸長途飛行が成功し、一九三三年にはシカゴの博覽會に百臺の飛行機を連ねて集團大飛行をやつて盛名を擧げた。一九三四年辭表を提出して受付けられ、リビヤ總督に任命せらるゝや世人は何の意たるやを解せず種々の噂を生んだのであつた(一六一頁)。然しこの暫くも停滯することなき活動家はリビヤに於ても彼に非ざれば出來ない事を企て、之を爲した。殊に驚くべきは彼の仕事の解放振りで、航空大臣時代も大臣室はガラス張りにし、晝は士官も兵卒も大食堂で同じ獻立の食事をとつたのであるが(一六三頁)、リビヤに於ても彼の解放的積極的な性格と生活とは、伊太利人は固よりアラビヤ人の間にすばらしき人氣を博した。アラビヤ人は彼を「鳥人の父」と呼ぶ。常に飛行機で各地を訪問するからである。大衆の集團に際しては「ドゥーチエ」(Duce)と云ふ叫び聲と「バルボ」と云ふ叫び聲とは相和する。彼は總督の上にリビヤに於ける陸、空、海の三軍を統率する最高總督に任ぜられた(一六三頁)。その行蹟に於てその性格に於てファシスト黨內ムツソリーニに次ぐこの人氣者がこの次に何をなすかは全世界の刮目して見る所であつたが、今次の大戰勃發後死去した樣である。(北岡壽逸)

佛國革命議會に提案せられたる人口增加案

佛國革命時代も人口增加案が主張せられ、流石に傳統を脫した時代丈に隨分突飛な提案が爲された。奢侈、獨身、僕婢等に對する重稅案、勤儉令案、子のある者と獨身者とには異なる衣服を着用せしむべしとの案、父には名譽と金錢的利益を與ふべしとの案、兵士にも結婚せしむべしとの案等を、更に革命第四年には獨身を死刑を以つて禁ずべしとの請願が提せられ、第六年には一夫多妻を主張するものすらあつた。又獨身は一般に非難され獨身者には公職に就くことを禁じ、輕蔑さるゝ如き衣服を着用せしむべしとの意見さえ發表された。

(Spengler. France faces Depopulation より 北岡)